

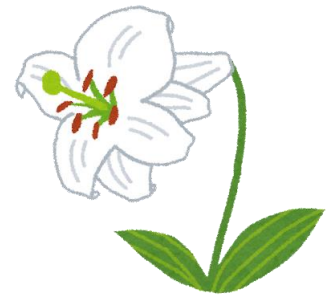
COVID-19からの学び

「おばあちゃん、見送ってあげられなくてごめんね。ありがとう」

「ばあさん、お疲れ様。これで本当に最期だよ」

患者とご家族との最期の場面である。何度もこのような場面に立ち合わせて頂くことはあったが、今回異なるのは、そのやりとりがベッドサイドではなくガラス越しのインターフォンを通してであったからだ。COVID-19 患者の受け入れが始まった時からいつかはこのような日が来るのではないかと覚悟していたが、実際に立ち会い、その現実胸が締めつけられた。

ご家族は処置後に患者との面会を希望されていた。そのため入室の際は防護具を着用して入室して頂くこと、直接触れることはできないため納体袋の上から触れて頂くことになる旨を説明した。ご家族は特に質問もなく説明に耳を傾けておられた。入室準備が整い病棟へご案内した。前室前でお待ち頂いている時に、看護師が防護具を着用し入室する姿を見ておられた。するとご家族が「入る時はさっき看護師さんが着ていた装いで入るのですよね、でしたら大丈夫です。大変そうですし、お手間ですから窓越しの面会で十分です」と話された。看護師への配慮に対しお礼を言い、ご家族が後悔されないことが一番であると伝えたが入室は希望されなかった。ガラス越しでの面会を終えたあと「まだ体は温かいですか」とご家族が一言話された。やはり触れたい気持ちがあるのだと思い、もう一度入室されるかどうかを伺ったが返答は変わらず入室は希望されなかった。きっと入室して近くにいても直接触れられなければ意味がないと感じていたのかもしれない。もしくは看護師の言動や行動が原因で遠慮されたのかもしれない。そんなふうに想像すると、相手や自身を守るための防護具は非常に残酷なものであることを見せつけられた。そして私はちゃんと家族に対しての対応ができていたのだろうか、COVID-19 に対する対応になってはいなかったのだろうか自信がなくなった。入院中も面会が許されず、どんなに不安であったろうか、面会が叶ってもガラス越しのうえに最期も触れることもできずに苦しい思いをしながら、誰が悪いわけでもないのに自責の念にとらわれてはいないだろうか、思いを知ることができずにこの場面に立っていることに家族に対する看護は十分でなかったと振り返る。



防護衣一枚、手袋が一枚から二重三重に増えることが、患者の温度や質感、振動など感じにくくなってしまい看護にやりづらさを感じる。それは患者に寄り添う看護が十分できていないことになり、もどかしさも感じている。入院中の1ヶ月を振り返り、申し訳なさが募っていたが、病室を後にされるご家族の「もっと会えないかと思っていたので、最期まで良くしてくれてありがとうございます」という言葉に救われた。

この事例を通しもう一つ感じたことがある。それはチームワークについてだ。逝去時の対応はマニュアル化されていたものの、初症例であること、そして現状とそぐわない部分に対する相談が休日であったため看護管理者が不在でできなかったことなど対応に混乱が生じていた。その場で対応していた時には気づかなかったが、すべてを終え振り返ってみると、混乱している状況と一緒に悩んでく

れたスタッフの心強さ、またその対応をしている間、他の入院患者を任せられるスタッフがいたことも感謝すべきことだったと気づき、感謝を伝えられていなかったことを反省した。任された看護師は私とは別な意味で不安を抱きながらその時間を過ごしていたかもしれない。そのことを忘れてはならない。ディスタンスが必要な今だが、この状況に対し共に分かち合えるノンディスタンスな仲間がいることは財産だと思う。いつもそこにいてくれたスタッフは当たり前のことではないことが分かり、そんな仲間に対しきちんと感謝を伝えられる人でありたい。

看護に対しては、COVID-19に限らず疫病は共にある物と覚悟し、こうあるべきだという看護にとられず、今まで当たり前にしてきたことができない状況を受入れ、臨機応変、柔軟に対応することが求められているように感じる。こういう状況こそ日頃の積み重ねが試されると思っている。安全かつ効率的で患者への侵襲を最小限にできる介入をするにはどうしたら良いか、こんな状況下だから仕方ないでは終わらせず、こんな状況下でも最善は尽せていたかを常に振り返ることを課題としていきたい。その際は、自分のこだわりが他者への押しつけにならないように提案方法に配慮しチームワークを乱すことがないようにバランスにも気をつけていきたい。